

水辺エコトーンにおける伝統的生業活動とコモンスの変容に関する研究

1. プロジェクトメンバー

佐野静代	環境総合研究センター助教授(研究代表者)
山崎古都子	教育学部教授・環境総合研究センター長
中村正久	環境総合研究センター教授
梅澤直樹	経済学部教授
堀越昌子	教育学部教授
松田隆典	教育学部教授
服部昭尚	教育学部助教授
牧野厚史	県立琵琶湖博物館主任学芸員
宮本真二	県立琵琶湖博物館学芸員
赤石直美	日本学術振興会特別研究員

2. 研究の目的と計画

現在、日本各地で水辺エコトーンの保全が重要な課題となっている。滋賀県においても、かつて琵琶湖沿岸には内湖をはじめとする水陸移行帯が広がっていたが、現在ではその多くが干拓・埋め立てによって消失している。

水辺エコトーンでは豊かな生物資源を利用して多様な民俗文化が展開されてきたが、これらは地域ごとに形成されてきた持続可能な資源管理システムとしても重要である。しかし今日、このような伝統的資源管理は、十分に検証されることのないままに失われようとしている。そこで本研究では、琵琶湖岸のエコトーンにおける生物資源の利用と、そこにみられた資源管理システムについて検証し、今後の水辺の「賢明な利用と保全」の方途を見出すことを目的とする。このプロジェクトでは、水辺エコトーンを共通フィールドとすることで、自然科学と人文・社会科学両分野にまたがる学際研究を推進する。具体的にはヨシ・魚類・水鳥などの生物相と、それを資源として利用する人間の双方を分析し、人間活動の影響を照合することによって、「人間を含んだ水辺の生態系」の全体像を解明する。

三ヵ年の計画で、自然地理学・生態学・歴史地理学・地域社会学・経済地理学・食物学・住居学・環境経済学を専門とするメンバーが、年間4回ほどの研究会で各自の調査報告と討議を行う。また毎年1回は外部への公開型の研究会を開催し、研究成果を学外にも広く公表する予定である。このような成果の集積に基づいて、三年目にはシンポジウムなど、より大きな成果公表の場を予定している。

3. 今年度の活動状況

研究会等の活動記録

- ・第1回研究会
8月11日(木) 16:30~18:00 大津サテライト
「研究の趣旨と今後の進め方について」
- ・第2回研究会
10月12日(水) 17:20~19:00 大津サテライト
宮本真二「水辺エコトーン自然环境変遷と人間活動」
- ・第3回研究会(「センター定例研究会」として実施)
12月4日(日) 13:00~16:30 大津サテライト
テーマ「コイ科魚類にとっての琵琶湖の水辺環境
- その生息に配慮した水位操作の試みへ」
山本敏哉(矢作川研究所)
「琵琶湖の水位調整とコイ科魚類の初期生態」
佐久間維美(国土交通省琵琶湖河川事務所)
「環境に配慮した瀬田川洗堰の水位操作と琵琶湖湖岸環境の修復について」
- ・第4回研究会
「国際湿地再生シンポジウム2006」への参加と成果発表(主会場:大津プリンスホテル)
1月27日~29日の「国際湿地再生シンポジウム2006」(主催:環境省・国交省・文化庁・県・ラムサールセンターほか)の第2分科会「多様で重層的な湿地の利用と再生」において、研究会メンバーの牧野厚史が座長をつとめ、研究代表者の佐野静代が研究成果の発表を行った。

活動内容とその総括

本年度の研究活動のうち、特に学外へのオープン形式とした第3回目の研究会では、参加者28名中、県内の研究機関・行政関係者12名、県外の研究機関より5名(東京・千葉)であり、幅広い関心を集めたことが特徴であった。このように本プロジェクトは、学外の研究機関や行政との連携・研究交流の場として重要な役割を果たしている。

また、第4回の活動として参加した「国際湿地再生シンポジウム」は、自然再生推進法の制定やラムサール条約登録地の拡大をうけて開催されたが、滋賀県が開催地に選定されたのは、まさに琵琶湖とその周囲の湿地の重要性による。このように近年では水辺の保全・再生に対する関心が全国的に大きな盛り上がりを見せており、琵琶湖岸の水辺エコトーンをテーマとする本プロジェクトは、滋賀に位置する当センターの研究活動にふさわしいものとして、今後も一層その意義を深めていくものと考えている。